



僕の、 呟き。



僕の小さな小さな恋

裕弥

キャンディー

その麗しき唇で
その芳しき舌先で

口移して 劇薬を
真っ赤な色した 毒薬を

二人一緒なら怖くない
闇の中でも怖くない

堕ちて逝くのよ 暗闇へ
とても明るい 暗闇へ

嘆くパパには ラブレター
遺すのママには 美味しい朝食を

死に化粧はばっちりしたから
ラインにシャドウにマスカラ、グロス

写真はとびっきりを用意したから
絶対これを使ってね

今飲み込むわ 劇薬を
真っ赤な色した 毒薬を

二人一緒に堕ちて逝く
闇の中に堕ちて逝く

懺悔室

北の城の窓の外を小さな雀が飛び立った頃
懺悔室に押し込められた罪深きファントムは泣いた

「どうしてあの人を愛したのですか？」

毎度繰り返される執拗な問いは
硬い椅子に座らされた罪深きファントムの心を亡くしていく

「どうしてあの人に惹かれたのですか？」

白い衣装を着込んだ修道士が
自分は清廉潔白だと微笑みの脅迫状を叩きつける

「赦されると思っていたのですか？」

力を失くした罪深きファントムを
突き刺さり血が滲む程の視線で眺める

「もう放っておいてください、僕らに関わらないでください」

世界、道徳と言わんばかりの修道士は
ファントムの嘆きは聞き入れず無視を決め込み問い続ける

誰に赦されぬとも構わない
神に赦されぬとも構わない

世界に絶望したファントムは夜毎窓辺に縋り付き
愛するあなたを思って謡う久遠の約束

もう一度、もしも逢えたなら、哀れ懺悔室の涙は
遠い地、幽閉室の頬を流れ落ちる

もう一度、あなたの掌を繋げる時は
僕らの愛を少しは認めてくれたということなのではないでしょうか

昔噺

あれは昔の噺

僕たち人間がまだ弱かった時代

竜と人間が共存し、互いを支えあっていた時代

竜と少年は出逢い、掛替えのない存在になった

いつも一緒に言葉など必要ないと思った

しかし竜と人は些細な喧嘩から

互いに睨み合う様になった

少年と竜は引き裂かれ

逢う事を許されなかった

人間は竜たちが寝ている隙を見計らい

竜の住処に焼き討ちをかけた

その中には少年の親友の竜もいた

少年は住処に走った

親友を助ける為に

竜は少年を待っていた

息苦しい穴の中で

翼が焦げた、空に逃げた、矢が放たれた

それでも竜は人間を傷つけなかった

仲間が皆、傷つき倒れても

竜は少年を待っていた

自由なはずの大空で

辿り着いた少年は竜を見つけた

青空に竜の碧い瞳を見つけた

少年は叫んだ、必死に叫んだ

大人は聞かない、弓は止まない

竜はとうとう地に墜ちた

一斉に構えられた弓、標的は竜の心臓
少年は必死だった、親友を守りたくて

少年は走った、竜の元へ
放たれた弓
一心に受けた、少年
全てを受けた、少年

竜は自分の目の前に立ち塞がる少年を見ていた

衝撃に驚いた
少年は倒れた
竜に微笑んだ

少年は死んだ

竜を守って

少年は死んだ

竜は飛んだ
泣き叫びながら、飛んだ

瞬間、墜ちた

竜は少年の隣に眠った

胸に弓を刺して

月下の君

華やぐ芳香りに酔わされながら
僕らの逢瀬は終幕を迎え
生温い風がすべてを攫った

数多の君の音 五月雨の下に隠れ
宴だ宴 今宵は十六夜
酌み交わせ 気持ち誤魔化せるまで
満ちるが早いか 欠けるが早いか

涙の滴で羽衣濡らして
天女よどうか帰らないで
指と指を結んだままで
決して離したりなんかしないで

長い髪を月に照らして
浮かび上がる白き肌
水面に這わせた君の素足を
縋り癢っていきたいの

星は流れて 月は隠れまた欠ける
愛だと恋だと嘲って見せて
僕らの逢瀬は永遠になる

君がすき。でも、いない。

もう一度あなたに会えたのなら、諦める決意ができたのに。

手を伸ばしたら届く距離。

愛して欲しいなんか言わない。ただ、好きでいさせて。

君がわらっていればそれでいいんだ。他はどうでもいいんだよ。

あんなにあいしていたのに。

あの思い出を、君はまだ覚えてる？

涙で流して終わりにしない
綺麗に笑って終わりにしない

ただ、愛してほしかった。

泣き出したって何一つ変わらない、僕らは

君を大切に想うよ。

降るような星を君にも見せたかった

ただ好きだと言って言いたくて。

どうしていなくなってしまったの。

必ず訪れる別れを知っていながらあなたを愛することなんかできない。

この世界の要らないものを全て消したらあなたしか残らないの。

また会えるなんて簡単に言わないで

酸素を求めるように生きていきたいの、あなたの事を

いつか笑顔で話せるように。

今僕が死んでしまったら僕の気持は永遠になる。

愛してる。 哀しい自己暗示と、つまらない虚勢。

眠れない夜、想うのは君のこと

君が好きで好きで、忘れ去ってしまいたいのに
どうしてこんなに惹かれていってしまうのだろう

かちりと進んだ時計の音が
君との距離を遠くした

僕らはきつとめぐりあう、その為に生まれてきたんだよ

愛してるよ。愛してるから、ばいばい。

例えこれが恋じゃなくても。

君とずっと一緒にいたい。ただそれだけを、切に願うよ。

愛することはきつと思ったよりも難しく
好きになることはきつと簡単なんだろうね

忘れたいのに夢に見る。忘れるなと戒めてるの？

愛した事まで忘れたならば
生きた証を棄てたも同然

花火の音に隠れて告げた「君が好き」

僕の、呟き。

<http://p.booklog.jp/book/80474>

著者：裕弥

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/ky1109/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/80474>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/80474>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ